

## 【巻頭言】

## 化学生物総合管理に係わる最近の想い：ゼロリスクと不寛容社会

Recent feeling regarding the management of chemicals and biologics:  
Zero-risk and non-tolerant society

中江 大

東京都健康安全研究センター 環境保健部

参事研究員

Dai NAKAE, M.D., Ph.D.

Senior Principle Research Scientist

Department of Environmental Health and Toxicology

Tokyo Metropolitan Institute of Public Health

のっけから言い訳じみたことを申し上げるのもいかなものかとも思うが、私としては、正直なところ当惑というか、困惑しているのである。「化学生物総合管理」誌の巻頭言は斯界の権威の方々が執筆されているもので、私如きの若輩者にはなかなか恐れ多い。とはいえ化学生物総合管理学会理事長の強い御意向とのことなので、私も覚悟を決めたわけだが、文語的表現が好きでも得意でもないので、今回の巻頭言はくだけた文体で化学生物総合管理に係わる私の個人的な想いを雑駁に語ることにする。読者諸兄姉におかれては、格調に欠けると御不満のことと思うが、そのへんのブログを読む程度に考えていただいて、御寛恕の程を。私は打たれ弱いので、くれぐれも「品格」がどうのこうのというような御批判は勘弁してもらいたいものである。それと、本文は、あくまでも私の個人的な想いなので、私の所属機関・その上部組織・本誌発行者である化学生物総合管理学会を含む、いかなる公的私的な組織の公式ないし非公式な見解や意見でないことに御留意ありたい。つまり、誤解や知識不足による間違いや言葉足らずな点は、すべて私個人に責任がある。

最近、化学生物総合管理は、実のところ、リスクコミュニケーションに始まり、それに終わるのだという想いが強い。リスコミはプロパーサイドによる情報発信行為・メディアなどによる情報伝搬行為・エンドユーザたる市民による情報受信行為から成り立っている。リスコミの重要性とかあり方についての講釈は、たいがい情報発信行為のみを対象ないし標的として行われるが、私に言わせれば、情報伝搬行為と情報受信行為も、いや、それらをこそ対象とせねばならない。

私が思うに、リスコミにおける情報発信行為に際して留意すべきは次の2点である。第1点は、個々の送り手はその時点での情報と立場において正直であることだ。わからないことはわからない、言えないことは言えない、調査中なのは調査中、などのスタンスでいっこうにかまわない。それが「正直である」ということだから。第2点は、受け手の反応にきちんと対応することだ。ことは単純でな

く、発信者側の管理サイドと現場サイドの温度差などもあって、このことについて簡単に述べることは難しい。これに関連する問題として端的な例を挙げると、いわゆるパブリックコメントの際に、寄せられたコメントに対して、しばしば何を言いたいのかわからん「言語明瞭意味不明瞭」な回答が行われることがある。情報発信者側の組織防衛なのかもしれないが、コメントを寄せた人が言っていることや訊いていることに正面から対応しないのは、いかがなものかと常々思う。第1点と同じく、わからないことはわからない、言えないことは言えない、調査中なのは調査中、などと「正直」に答えればいいのに。まあ、コメントする方にも、とりあえず言いたいことを言えればそれでよくて、どんな回答が来ても気にしない手合いもいるので、どっちもどっちだが。

リスクミにおける情報伝搬行為と情報受信行為には、情報発信者サイドのコントロールが及ばない部分があって、簡単に言うと、いくら情報発信者サイドが気を遣い丁寧に対応しても、所詮、情報伝搬者も情報受信者も自らの都合でしか動かないのである。こまったことに、どんなにコントロールされて送り出された情報に対しても、誤解し、または、十分に理解しない情報伝搬者・情報受信者は存在するし、それだけならまだよいが、あえて曲解する輩すらいるわけである。さらには、そうした誤解や曲解によって歪められた情報を作為的または（無知ないし情報不足により）非作為的に拡散する者達もまた、社会には無数に存在する。

情報伝搬行為におけるインターネットの功罪については、しばしば言及されるところである。ネットは、情報伝達の手段として、もはや単に重宝であるというようなレベルのものでなく、今や欠くことができないものである。私だって毎日ネットを使っているわけだが、そこには、わけのわからない情報がやまほどあり、それらがまことしやかに伝搬されているのだ。実際のところ、不正確な情報や明確に特定の意図を持ってわざと間違った情報、また、情報の恣意的な解釈と扱いなどに遭遇してびっくりすることがけっこうあるし、正直こりゃヤバいわと危惧することだってけして少なくない。メジャーメディアが相手ならある程度ウォッチできるし、必要なら文句も言えるが、匿名性も高い膨大なネットユーザを対象にそんなことは不可能だ。一方、メジャーメディアがきちんとしているかと言えば、こまったことに、これがまた始末が悪いのであるが。いわゆる「健康食品」にまつわる無責任な不適切情報の伝搬は、「あるある大事典」事件とかシロインゲンマメ事件の頃に比べれば少なくなったかもしれないが、なくなったわけでない。また、問題は、必ずしもその手のヴァラエティ系 TV ショーだけでなく、報道系にしたところで傍観者面していられないところにある。ネットに比べればはるかにましだと言う向きもあるが、メジャーメディアにしても、けしてそうとも言えないレベルで、不正確な情報や明確に特定の意図を持ってわざと間違った情報の伝搬、また、情報の恣意的な解釈の流布という過ちをしばしば犯している。

このような情報伝搬行為の問題には、よく考えれば情報受信者、すなわち市民サイドにも責任の一端がある。リスクミというのは、そもそも市民の生活環境に対する化学物質などのリスクを最小限に抑えるために行われるものである。その中で市民が求められているのは、受信した情報を吟味して自らの生活に活かし、さらに、場合によって情報発信者や情報伝搬者に適切なフィードバックを行うこ

とである。化学生物総合管理というものは、このフィードバックが良好に働いてこそ完結し、有効に機能するものである。すなわち、市民たるものは、情報を受動的に受けるだけでなく、能動的に選別し、問題点を指摘することが必要なのである。実は、これこそが化学生物総合管理の肝である。エンドユーザがノーと言うような情報は伝搬されない。需要がないからであり、ぶっちゃけ儲からないからである。情報受信者の「正しい」振舞は、情報発信者に対しても同様に影響する。テキストで無責任な情報を発信すれば、しかるべきフィードバックがあるからである。メカサイドなら売り上げに、規制サイドなら勤務評価に影響するような、そんなヤバイ橋は、誰も渡らない。そして、きちんとした情報を発信するためには、リスクアセスメントやリスクマネジメントも、自ずから「きちんと」しなければならない。そもそも、プロパーサイドである情報発信者も、メディア等に所属する情報伝搬者も、当事案件以外のものについては、エンドユーザなのであり、すなわち情報受信者なのだ。そう考えると、要するに、化学生物総合管理というものは、自分の身を守るのが自分であるという原始的かつ素朴な観念を基盤とするものであるということ、あらゆるステークホルダーが一度再認識すべきなのかもしれない。

化学生物総合管理に関してこのところ私が懸念していることのひとつが、いわゆるゼロリスクという概念である。基本的に、リスクがないということがあり得るか、リスクがない（ゼロリスクな）化学物質や生物由来物質というものが存在するかという根本的な命題については、ちょっと考えれば回答が明白である。だが、ゼロリスクという概念は、市民にとって、きわめて魅力的だ。そして、そういうことになってくると、意図的に特定の方向へと煽るグループが現れるであろうことは容易に予想され、事実、そうしたグループは存在する。その手の連中についてはともかく、市民がゼロリスク概念を魅力的なものと感じ、その実現を要求するということになる、これはこまった事態である。私は、これこそ、化学生物総合管理のプロフェッショナルが、それぞれの立場で対応すべき問題だと考えている。アカデミアは、科学的な知識を基に「ゼロリスク」に関する正確な情報を発信すべきである。インダストリは、技術的な観点だけでなく、企業ポリシーの観点からも、想うところを表明すべきである。レギュラトリーは、それらを背景として、しかるべくポリシーメイキングを行い、前述のように「正直」な情報発信と「丁寧」な対応を行うべきである。この点では、本来なら消費者庁に期待するところが大きいわけだが、そもそも消費者庁という役所が今のところどういう方向性で動くつもりなのかよくわからず、いろんな人がいろんなところで心配している状況なので、もう少し事態をウォッチせざるを得ないのである。そして、メディアには、ここの一番、冷静かつ客観的な報道で汚名を濯いでもらいたいものだ。キャンペーンでも張ったらどうか。この問題で私が何をもっとも懸念しているかということ、化学生物総合管理の現場に携わる専門家の中に、さすがに「ゼロリスク」というタームを使わないものの、「正義の味方」面で「ゼロリスク」っぽい言動を行う人々が出現し始めていることなのである。確信犯というか、「正義の味方」面じゃなく本気そうな人さえいるし。さて、どうしたものだろうか。

私は、最近、なんとなく社会の寛容性が減少している印象を持っている。なんだか、やけに清教徒的な風潮が幅を利かせつつあると感じるのである。化学生物総合管理とは全く関係ないが、その端的な例はスポーツに見受けられる。ちょっと前の亀田兄弟のこと、つい最近の（元）朝青龍のこと、そして、これを書いている時点でもっともホットでアプトゥデイトな国母クンのことなどである。そりゃ確かに当事者の言動に問題はあったし、不快な人には不快だろうが、そうでない人もいるわけだし、そもそもそんなに目くじら立てることか？ たとえば、国母クンのことなんて、ハーフパイプというスポーツの文化的背景とか、個人的性格とか、その辺りのことを知りも斟酌もしないで、偉そうにとやかく言う人間のなんと多いことか。そういう連中や、それを煽るメディアこそ恥を知るべきである。挙げ句の果てに、本国召還だとか、出場を辞退させるとか、開会式を「自粛」させるとか、さらにはゲームが終わった今でさえ彼に関する報道の度にいつまでもグチグチと「服装問題」に言及するとか、なんと愚かでばかげた話だ。そういう不寛容な態度がかっこ悪いと考えないのだろうか。私は、全日本スキー連盟と日本オリンピック委員会の行動、文部科学大臣と某漫画家（何様か）のコメント、そして国母クンの父上のコメントを見聞きして、ほんとうに哀しくなった。延々と化学生物総合管理と全く関係ない話をして失礼したが、私は、本気で不寛容な社会が形成されつつあることを深く憂慮しているのである。本来、このような社会的な不寛容性は、シー・シェパード（の末端構成員）に典型例を見るように、ある種の歴史的宗教的背景を念頭に論じられるべきものである。もちろん日本社会に不寛容性がなかったわけでないが、最近の状況は、いささか常軌を逸しつつある。そして、私には、このことが、「ゼロリスク概念」の流行の理由のひとつなのかもしれないと考え、そこにある種の不気味さを感じているのだ。そのほかにもいろいろあるが。これからの化学生物総合管理は、不寛容社会とどう折り合いを付けていくかという問題を真剣に考えて進めなければならないのかもしれない。